



「便所」遺構

3. その他

その他に幾つか備中櫓に関連する遺構が見つかっています。それらを順次説明します。

溝は東西方向・南北方向に数条確認できており、その構造は①やはり鉄釘の出土から木樋と推定できるもの、②陶器製の土管を使用したもの、③豊島石を使用したものなどがあります。なかには大量の炭が堆積している、文化6年(1809)の火災により埋まったものと思われる溝も存在します。また陶器製の土管は備中櫓の「便所」に伴う「手水」から伸びるものと推定されています。

調査区の北側に上面の高さの比較的揃った礎石がいくつか認められました。これらは文化6年の火災以降に備中櫓が改築され、本丸御殿と続くようになった時の建物の礎石と考えられます。

備中櫓の北東部に、1.5m×1mの範囲に、平坦なタタキの面が認められました。この面の一端は上方に屈曲してさらに上に続いていたようです。またこの面の中央付近には径20cm、高さ25cm程度の甕が埋められています。この遺構については性格は不明です。ただ、絵図面によるとこの部分は「御庭」となっており、庭の施設の一部かと推定されます。

4. 出土遺物

平成9年度と同様に、瓦類・鉄釘・陶磁器等が出土しています。特に瓦の中に、「揚羽蝶」の文様のついた菊丸瓦(屋根の「棟」に埋め込む小型の丸瓦)が出土していることが注目されます。

備中櫓は森忠政の娘の嫁ぎ先である池田備中守長幸(ながよし)に因んで建てられた(「森家先代実録」といわれており、「揚羽蝶」の紋は池田家の紋であることからその関連が注目されます。

まとめ

以上、今年度の調査の概要を示しました。

今回の調査の成果として

①現在の備中櫓に先立つ石垣が内面に存在することが明らかになった。この石垣は築城当初のものではないかと思われ、築城から正保年間までの約40年のうちに改築が行われていることが確認できるものである。

②備中櫓については、基礎部分が良く残っており、その規模が明らかとなった。またその構造についても礎石ではなく土台を使用していたと思われることが明らかになった。また便所部分の構造も明らかとなった。

③排水施設については、昨年度の調査によって木樋と豊島石製の排水溝が確認されたが、今年度はさらに陶器製の土管による排水施設が確認できた。

今回の備中櫓の調査が、城内の櫓初の調査となりました。櫓の規模・構造を確認するという当初の目的はほぼ達成されましたが、さらに内側に未知の石垣が存在するという新たな発見もありました。

今後も津山城の調査は引き続き行われます。今回の調査の結果についてはまだ整理中ですが、本年の調査の成果を踏まえて、さらに津山城の構造の解明に努めていく必要があります。



「揚羽蝶」菊丸瓦

発行年月日 平成11年7月15日
編集・発行 津山市教育委員会
津山城整備推進係
〒708-8501岡山県津山市山北520
TEL. (0868)23-2111 (内線)2665
印刷 株式会社 廣陽本社

地下には溝が縦横無尽

平成9年度の調査から



調査区全景(中央に見えるのが石組遺構)

はじめに

平成9年度は、津山城の最初の調査ということで遺構の残存状況などを確認するために、まず本丸入口部分の発掘調査を行いました。

この部分は絵図によると、本丸の南辺に建てられていた到来櫓から、本丸内の台所門へと北方向に延びる石垣の存在が記されており、その石垣を確認する事を目的として調査区を設定しました。

調査の概要

1. 到来櫓

最初に位置の起点となる到来櫓の基礎を確認するためにトレンチを設定しましたが、到来櫓の基礎は確認できませんでした。

2. 石組遺構

到来櫓から台所門に続く石垣については、石組遺構がその最下段に相当する可能性が考えられますが、これは東西2.5m、南北4.5m程度の範囲に限られ、絵図のように到来櫓まで続くものではありませんでした。

3. 溝

石組遺構の中央に溝が東西に貫通していました。こ

の溝については鉄釘が元の位置を保ったまま多量に出土しています。これは木樋を用いた暗渠排水であることが推定され、釘の配置から、木樋の構造も推定できます。この溝の中央部分には「榊」状の遺構が存在し、その西側では南西方向へ溝が取り付いており、東側では木樋が豊島石製のU字形の排水溝に接続することが確認されました。

調査区の北側部分では、本丸御殿と台所門の境界かと思われる溝を検出しています。

4. 台所門

台所門の礎石についても確認できませんでしたが、台所門の想定範囲で拳大の石を敷き詰めた状況が認められ、その東辺及び南辺には河原石で底及び両側壁を作る溝が存在する事が明らかになりました。この溝についても鉄釘が多量に出土しており、木樋の暗渠排水であると推定されます。



溝の状況(東から)

5. 出土遺物

出土遺物には瓦・鉄釘・陶磁器類があります。鉄釘は主に木樋・榊に使用されていたものであり、長さが20cm近くあるものが多く出土しています。また、陶磁器の中には松平家の槍印である「剣大」の文様がついたものも出土しています。



「台所門」付近（東から）

まとめ

本年度の調査では、当初の目的であった石垣あるいは建物の礎石等について、絵図との対応が必ずしも明確にはなりませんでしたが、地下の排水の構造の一端が明らかになるなどいくつかの成果がありました。特に排水溝は素掘りの溝、石組みの溝等のバリエーションが認められ、さらに本丸内部では基本的に木樋を使

石垣の中にまた石垣

平成10年度の調査から

はじめに

平成10年度は本丸南西部の「備中櫓」についてその遺存状況や規模・構造を確認するための調査を行いました。調査面積は約350㎡、調査期間は平成10年9月21日から平成11年2月23日までです。

備中櫓は、本丸御殿の一部として使用され、文化六年（1709）の火災でも焼け残ったことが絵図や記録から知られている建物で、古写真にもその姿が認められます。



調査区全景

用していることが確認でき、出土した鉄釘の位置から木樋や榑の構造もある程度明らかにすることができました。

しかしながら検出された遺構については性格が不明確なものも多く、絵図との照合も含め、今後詳細な検討が必要となっています。

出土遺物については整理中ですが、19世紀代のものが多いようで、森氏の時代に遡るものは現在のところ認められていません。



出土遺物（溝出土の鉄釘）

調査の概要

1. 内側石垣

調査の途中で現在の備中櫓石垣の内側に一回り小さい石垣が存在することが明らかになりました。

この石垣は、規模が石垣上面で東西約14mです。西側は北へ約9m延び、そこから約70°の角度で西へ折れ五番門南石垣の下に入ります。この石垣は五番門西側まで延びていることを確認しました。東側も同様に約7m北に延びており、そこから約60°の角度で東へ延びています。こちらがどこまで続くのかは不明です。石垣の高さは、南西隅で約3m確認していますが、さらに下方向に続いているようなので、現状では3m以上としておきます。

この石垣の特徴として、板状の割石を立てて使用し、その隙間を小さな石で充填していることが挙げられます。普通は板状の石は横方向に積みますが、ここでは個々の石の一番大きな面を石垣の表面に現わすように石を積んでいます。特に南西隅部は厚さ20数cm高さ1m以上という板状の石を使用しており、非常に不安定な積み方になっています。また、現状で観察できる範囲では石に「矢穴」（石を割る時に楔を打ち込むため



内側石垣南西隅部分

の穴）は認められません。

時期については、当然備中櫓が建てられる以前のものです。正保絵図（江戸幕府が正保元年（1644年）に全国の大名城の絵図の作成を命じたときに作成された絵図）にはすでに現在の備中櫓石垣の形が示されているので、正保年間以前であることは間違いありません。築城当時（1604～）のものと考えられます。

2. 備中櫓

a. 石垣

備中櫓の石垣は東西約25m、西面は南北約15mです。東面は南面に対して約80°の角度で13m程度北へ延び、北東方向へ延びる内側石垣にぶつかって終わっています。なお、櫓台東面は南から約7mの場所で東方向に長局の南面石垣が取り付けられているので、本来ならば備中櫓東面石垣の北半分側約6mは石垣を築く必然性はありません。にもかかわらず現状で高さ約2mにわたって石垣が存在しています。何故ここに構造的には不必要な石垣があるのかは今のところ不明です。



備中櫓東面石垣（北から）

石垣の構築順序を確認しておくと、①内側石垣②備中櫓石垣③長局石垣の順となります。ただし備中櫓東面石垣と長局石垣については石垣裾部（二の丸の高さ）では長局石垣→備中櫓東面石垣の順で構築されており、上面（本丸の高さ）とは構築の前後関係が逆転しています。あるいは②と③については時期差ではな

く「工程差」であるのかもしれませんが。

b. 基礎

調査の結果、櫓の基礎については、西・南・東の三面は櫓台の上に直接乗り、北側は櫓の平面形に沿った形で基礎の石を1ないし2段に据えていることが確認できました。また、南側石垣の上面の西から4m付近から19m付近にかけて、長さ30cm程度の扁平な板石を北に面を揃えて並べている状況が確認できました。この石の中には排水溝の材料を再利用したとみられる豊島石も混じっています。

建物の礎石については、いくつかそれらしい石が存在していますが配置は不規則でまばらです。また確実に礎石の抜取りと判断できるものは存在しませんでした。このことから、備中櫓は柱を土台の木材の上に載せた構造の可能性が考えられます。前述の北側の水平に揃えられた基礎石や南側の扁平な石の並びなどもその可能性を示しているものと考えます。



備中櫓北側基礎の状態（西から）

c. 付属施設

備中櫓の絵図には、櫓北西の突出部に「便所」があることが示されています。この部分の調査を行ったところ、便所らしい遺構が現われました。

「小」の部分は平瓦を4～5枚立てて囲い、その中や周囲に小礫を充填していました。「大」の部分は80cm×140cm程度のタタキの範囲が存在します。このタタキには板材と角材を据えていた痕跡が認められました。



備中櫓南側基礎の状態（西から）